

誇りを持って、ふるさとを思う。 すると、自然に元気が 出てくるんじゃないかな？

漫画家 倉田よしみ

僕は「味いちもんめ」を描いて26年になります。この漫画は板前と料亭を題材に「食」を軸に練り広げられる人間関係の味付け模様を描いています。ですから「この食事はここが旨い」と言ったことをグルメレポーターのように上手くコメントすることは、僕自身得意ではないです。食材が豊富で様々な郷土料理のある秋田に生まれ育った僕に、「食」の知識がないわけではありませんよ。味覚も鈍感でなく、どちらかと言うと敏感。けれど、コメントのどうのこうの…の部分には苦手です。(笑)

高校の同級生がたまたま学校に手塚治さんの雑誌「コム」を持ってきていて、それを見せてもらったのが漫画との出会いでした。高校時代は外で活発に運動するタイプではなく、もっぱら家で色々と考えことをするのが好きだった僕にとつて、この漫画との出会いは好奇心をくすぐる刺激的なものでした。今日のように取材を受けて

いても、そこでの食材はもちろん、そこに練り広げられる人間の表情や言動の観察を楽しんでしまう。漫画家は考えを頭の中で熟成させ、それにストーリー性を持たせ、絵に落として表現する職業なのです。漫画家に無口な人間が多いのは、職業の柄かも知れませんね。秋田の人はどちらかと言ったら寡黙ですよ。それは必ずしもマイナス要素だけでなく、じっくり観察するというプラスの要素にも通じると思っています。

秋田に生まれ、 東京で漫画を描き、 関西で教鞭をとつて

僕はいずれは秋田に帰ることを考えていたので、住民票は秋田に置いたままです。今は秋田・東京間の往復の生活に加えて、関西の西宮にある大手前大学でメディアと芸術を教える時間をいただいております。比べてみると、関西の人はそう時間をかけずに人に話しかけます。秋田の人は話しかけるのに、ちよつと時間がかかるかな？しかし一旦打ち解け始めると関西人も東北人も変わりはありません。秋田の人は十分な情報がないと話かけられない。一方、関西の人はある程度の情報でも話しかけ、自分をさらけ出して会話しながら関係を深めていきます。僕は情報の不足を恥ずかしいと思うことなく話しかけ、知らないことを

教えていただきながらの関係作りもあると思うのです。コミュニケーションの入り口を早めにセットしたほうが情報量が多くなるのではないのでしょうか？

自信を持って 秋田の食を楽しむ

帰るたびに、なんと、ふるさと秋田は美しい国だと感じます。黄金色の稲穂が織り成す豊かで美しい田園風景は何とも言えません。開発されていない美しさがそこにはあると思うのです。今日も素材の味を感じたく「生卵ご飯セット」をいただきました。これからは素材の安心・安全の時代。こんな時だからこそ、僕は、地元の人が、秋田の食は新鮮でなんでも美味しいと自信をもって食べ、発信していけば、自然に評判が広まって人が集まるようになると思っております。



昭和29年(1954年)秋田市生まれ、高校卒業と同時にちよつと先生のアシスタントに。昭和53年(1978年)「萌え出す…」が小学館新人コミック大賞に入選、同作をシブチ。昭和58年(1983年)より「味いちもんめ」を連載。平成11年(1999年)第44回小学館漫画賞を受賞。現在も連載中。